読んでみよう! ウォールペイントのモチーフになったお話



1	「大力の黒牛と貨物列車の話」	当時、安城駅前にあった金魚屋(現在の広千)に牛が飛びこんだ大事件をもとに書かれました。
2	南吉の願いごと	安城で「童話作家になる」という夢をかなえた南吉。ここには7つの作品が描かれています。「お ぢいさんのランプ」「貧乏な少年の話」「蟹のしゃうばい」「ごんごろ鐘」「王様と靴屋」「うた時計」「こぞうさんのおきょう」 の7つです。
3	「巨男の話」	立体駐車場の壁面いっぱいに、安城時代の作品を中心とした9つのお話、「ごんごろ鐘」「うまやのそばのなたね」「巨男の話」「赤いろうそく」「みちこさん」「木の祭り」「うた時計」「二ひきのかえる」「ガア子の卒業祝賀会」が描かれています。
4	「手袋を買いに」	寒い冬の夜、母きつねは、里の村に手袋を買いにいった子きつねが心配でなりません。
5	「春は梨畑から野道を縄跳びして来た話」	「あんたどこからいらしたの?」、春の精である少女にきくと、「向こうの方からきました」といいました。
6	商店街を歩く南吉	新美先生は当時、この商店街を歩き、安城高等女学校(現在の桜町小学校の場所)に通勤していました。
7	石	おだやかな春の陽に、石に腰をかけて、ほっとしている表情の南吉です。
8	「手袋を買いに」	きつねのすむ森に、ある日どっさり雪がつもりました。外で遊んだ子きつねは手が冷たくてなりません。
9	女学生と歩く南吉	新美先生はとても熱心に、日記を書くこと、詩を作ることを生徒に指導した先生でした。
10	花	「今朝はなんてすばらしい、みんなが花を持ってきてくれた」、教室で思わずほほえむ南吉です。
11	「おぢいさんのランプ」	池のほとりにたくさんのランプがつるされ、あたりいちめんは昼のように明るくなりました。
12	「百姓の足、坊さんの足」	和尚さんは地べたにこぼれたお米を足でけちらかしました。菊次さんはどうにも納得がいきません。
13	「去年の木」	「さよなら、また来年きて、歌をきかせてください」、森の一本の木は、なかよしの小鳥にいいました。
14	南吉の世界観	大好きだった花、動物、音楽。その中で童話を読んでいる青年教師、南吉の幸福そうな姿です。
15	「最後の胡弓弾き」ほか	「花のき村と盗人たち」「和太郎さんと牛」「最後のこきゅう弾き」、安城時代の3つの作品のワンシーンです。
16	「牛をつないだ椿の木」	海蔵さんの作った新しい井戸に、新しい清水が豊かにわいていました。海蔵さんはただにこにこしていました。
17	「カンザシ」	「さかなさん、かんざしをひろってください」、女の子はかんざしを池の中におとしてしまったのですが・・・
18	「花のき村と盗人たち」	釜えもん、えびのじょう、角べえ、かんな太郎。盗賊の弟子たちが、お屋敷にしのびこもうとしています。
19	笑顔で走る南吉	笑顔いっぱいの南吉。健康にもめぐまれ、女生徒の遠足を引率した楽しい日の南吉先生です。
20	「疣(いぼ)」	「よいとまァけー!」、3人の少年は大きな声を出して、力と気持ちをあわせました。
21	りんごの車	子どもが押していた荷車にのっている、おいしそうな3かごのリンゴが描かれています。
22	「ラムプの夜」	森の近くの一軒屋にすむ姉妹は、ある停電の夜、お父さんが昔買った古ぼけたランプに灯をつけました。
23	「良寛物語手毬と鉢の子第5章 紙鳶を買う銭」	役者の似顔の大きくりっぱな凧を、新太郎ちゃんは強い風にあおられて、思わず手を放してしまいました。
24	「蟹のしやうばい」	カニはいろいろ考えたあげく、とこやをはじめました。山へいき、昼寝をしているタヌキに声をかけました。
25	「お母さん達」	お母さんになった小鳥と雌牛が、生まれてくる赤ちゃんのためにカエルさんから子守歌を習っています。
26	牛鍋を食べる南吉	この店にしばしば南吉は訪れていたようです。今でも「南吉の間」があって、そこで食事ができます。
27	俳句「ぷりむらハわかるる頃に咲く花ぞ」	南吉は大好きだった花「プリムラ」を題材に、教え子の卒業記念に俳句の短冊をプレゼントしました。
28	俳句「うぐひすの声のまるるやけごん瀧」	南吉は修学旅行の引率で日光にいき、同僚の先生と一緒に旅の絵を画帖を描き、この俳句を詠みました。
29	俳句「講堂にピアノ鳴りやみ秋の薔薇」	音楽も好きだった南吉。当時、使われていたピアノが修復され、現在、アンフォーレ内に展示されています。
30	弥厚翁と南吉	明治用水を計画した都築弥厚の物語を書こうと、資料を手にする南吉の姿です。
31	牛	働く牛、寝そべる牛・・・、南吉がいた頃の安城には、農耕や運送のため働く牛がたくさんいました。